

学生海外調査研究	
フレイレ教育思想における「愛」概念に関する研究	
氏名 前村 絵理	人間発達科学専攻
期間	2015 年 8 月 22 日～2015 年 10 月 02 日
場所	ドイツ・ミュンヘン
施設	IfZ（現代史研究所）の記録保管所・図書館

内容報告

1. 問題の所在と研究の目的

今日グローバル化が進展し、日本再興戦略（平成 25 年 6 月 14 日）の中で、グローバル化に対応する人材力の強化や、高度外国人の活用が唱えられた。また、在留外国人（旧登録外国人）の数は、1993 年の 132 万人から 2013 年には 207 万人へと増加している（法務省，2001；法務省，2013）。このように多民族・多文化化が進む中で、様々な背景をもつ人びとがいかにして共に生きるかという「共生」が大きな課題であり、共生を可能にする教育が求められている。

ドイツでは、幼児期における偏見を意識した教育を推奨する「キンダーヴェルテン」プロジェクトが実施され、偏見や差別を幼児期から防止・克服することが目指された。前村（2015）は、「キンダーヴェルテン」プロジェクトの理論・実践とフレイレ理念との関連についての詳細な検討を行い、プロジェクトの理論と実践においてフレイレの「対話概念」と「意識化理論」が具体化されていることを明らかにしている。

Berryman（1984）によると、フレイレの「意識化」は BCC（キリスト教基礎共同体）¹の活動に影響を与えており、BCC からくる草の根の経験によって大きな刺激を受けたのが「解放の神学」である。フレイレは、WCC（世界教会協議会）²が 1973 年に開催したところの「黒人神学・ラテンアメリカ解放の神学シンポジウム」において南アメリカを代表して発題している。そこで、申請者は、2014 年 9 月、スイス・ジュネーブにある WCC において、「黒人神学・ラテンアメリカ解放の神学シンポジウム」に関する文献・資料調査を実施した。調査の結果、シンポジウムにおける発題³においてフレイレが、支配社会階級のイデオロギーにとらわれている人々を抑圧者として一括りで捉えるのではなく、「ナイーブな人びと（the naive）」と「抜け目のない人びと（the shrewd）」に分類し、ナイーブな人びとの意識の変革を試みたことが明らかになった。また、予言的教会⁴としての教会の一致や人間解放にむけて行動を変革するための手段としての教育のあり方をフレイレがシンポジウムにおいて提唱したことも明らかになった。そして、シンポジウムにおけるこのフレイレの試みと、被抑圧者の立場をとるという選択をし、抑圧者をも彼らの非人間的な状況から解放しようと試みる解放の神学における「普遍的愛」のつながりが見いだされた。

ドイツでは、ナチス支配下において「白バラ」という反ナチス抵抗運動がミュンヘンの学生たちによって行われた。山下によると、『白バラ』とキリスト教は絶対に切り離せないということは断言してよい（山下，1986：87）。また、白バラのビラは、「その筆者が連帯感情を持つ人々、すなわち『キリスト教的西欧的文化を担う一員』、『キリスト者たる君』と書くことができる相手に対して作られたもの」（ペトリ，2006：93）である。白バラのビラは計 6 種類作成されたが、2 番目のビラでは、ナチスによる残忍非道な行いを目の前にして無関心でいることは有罪であると非難されており、愚かな眠りから目を覚ますことが訴えられている。

抑圧からの解放を求めて、被抑圧者の立場をとるという選択をし、無関心ゆえに抑圧する側にいる人びとをも非人間的な状況から解放しようとする点で、解放の神学における普遍的愛とのつながりが見いだされたフレイレのシンポジウムにおける試みと、白バラ抵抗運動のつながりが考えられる。そこで、フレイレ教育思想における「愛」概念への理解を深めるために、白バラ抵抗運動に着目し、フレイレとのつながりを明らかにすることを目指す。

2. 白バラ抵抗運動とキリスト教

白バラ抵抗運動とは、第二次世界大戦中、ナチス・ドイツに対して行われた非暴力的な抵抗運動である。1942年夏に書かれた第一号のビラに始まり、計6種類のビラによって、ヒトラー政権に抵抗し続けた。白バラ抵抗運動の中心メンバーは、ハンスとゾフィーのショル兄妹、ヴィリー・グラーフ、クルト・フーバー教授、アレクサンダー・シュモレル、クリストフ・プロープストの6人である。ショル兄妹はプロテスタントであり、ヴィリー・グラーフとクルト・フーバー教授はカトリックである。また、アレクサンダー・シュモレルはロシア正教の洗礼を受けており、クリストフ・プロープストは処刑直前にカトリックの洗礼を受けた。信仰のあり方はそれぞれであったが、彼らは「キリスト教」という信仰共同体の中で育ち、そこに自らの存在の根を持っていた（山下，1986）。山下によると、「神の教えにそむいていない、あるいは、より積極的に、神の御旨に従っていると確信し得た時、人間は、神以外の権威から全く自由になり得る」（山下，1986：93）のであり、以下のハンス・ショルの言葉が示すように、構造から個人を保護し、個人が自由な判断を下すことを保証する、別の権威としての神の存在が、この抵抗運動を可能にした。

僕はいま自分がある通りのものである以外ない。…今、生きるということが絶え間ない危険と同義になってしまった今。しかし、僕自身が危険を選んだのだから、僕は自由に、縛られないで、目標に向かって進んでいかなければ。道を誤ったことは幾度もあるし、深い淵が口を開け、夜の闇が道を求める僕の心を包んでいるのもわかっている。-しかし、僕はあえて踏み出すのだ。クロードルのあのことはなんと偉大だったことだろう。人生は光に向けての偉大なる冒険行だ（Lavie, C'est une grande aventure vers la lumiere）。

（山下，1986：99）

3. 調査対象と明らかになったこと

3.1 回覧誌「風防燈火（Windlicht）」

－インゲ・アイヒャー＝ショル遺品 ED:474 Band:0123 “Aufsatzentwürfe, Windlicht-Ausgaben und Tagebücher” より－

1941年夏、戦争によってヨーロッパ各地に散らばった10人ほどの若者グループは、自らの振る舞いに確固な精神的基盤を与え、魂を破壊するような政治システムにもかかわらず、精神的テロの暴風から彼らの抱いた疑問や問題を守るために、「風防燈火（Windlicht）」⁵という名の回覧誌を試みた。この回覧誌を作ろうと言い出したのは、後にショル兄妹の姉インゲ・アイヒャー＝ショルの夫となるオトル・アイヒャーであり、白バラ抵抗運動のメンバーであるショル兄妹らもこの回覧誌に投稿している。詩（Gedichten）や考察（Betrachtungen）、スケッチ（Zeichnungen）が周期的に編集され、グループ内で共有されることで、戦争によって不可能になってしまった個々人のつながりは回覧誌によって可能となった。回覧誌の全体的なテーマは、破壊・ニヒリズムに染まった世界において、真実（die Wahrheit）、正義（die Gerechtigkeit）、自由（die Freiheit）、美や感覚への権利（das Recht auf Schönheit und Sinn）の追求に特徴づけられる。その後、1942年夏に白バラ抵抗運動の第一号のビラが作成されていることから、この回覧誌が白バラ抵抗運動の精神的支えになっていたことが考えられる。

3.2 回覧誌「風防燈火（Windlicht）」におけるトマス・アキナス

インゲ・アイヒャー＝ショル遺品 ED474 を対象に調査を行った結果、白バラに影響を与えた回覧誌『風防燈火（Windlicht）』においてトマス・アキナスの本が紹介されていることが明らかになった。また、回覧誌『風防燈火（Windlicht）』において紹介されている唯一の本がトマス・アキナスのものであることから、トマス・アキナスが彼らにとっていかに重要な存在であったかが伺える。以下は、回覧誌『風防燈火（Windlicht）』において紹介されたトマス・アキナス著『神学綱要（Compendium Theologiae）』における「救済教義綱要（Grundriss der Heilslehre）」の一部を筆者が訳したものである。『神学綱要』は、トマスの著作の中でもあまり研究される事がない著作であるが、山口（2012）によると、『神学綱要』において、『神学大全（Summa Theologiae）』における議論より詳細な議論をしているものや、思想的な示唆を与えてくれる箇所などがあることから、研究する意義の十分にあるテ

キストである。

回覧誌『風防燈火 (Windlicht)』における「救済教義綱要 (Grundriss der Heilslehre)」

哲学者がすでに年を取ってから気づくことを、神は神を信じるものに啓示している。神の存在 (Sein) と本質 (Wesen) は、神を信じるものにとって同一である。知識 (die Erkenntnis) は、もはや賢いもの (die Weisen) だけのものではなく、威厳を失うことなく、混乱の中から人間を助けるために、民衆のもとへと下ってきた。

人間のすべての願いは幸福へと向けられている。しかし、身体が貧しさを、そして精神が理性を失った時、欲望によって、この概念は物的所有や精神的墮落といったレベルまで引き下ろされてしまう。人間は、欲望を求めて魂を犠牲にする。この空虚な概念は、神を信じるものの思考においては、救いという概念へと変化する。救いのうちに喜びがあるのであり、喜びのうちに救いがあるのではないことは疑う余地がない。神は自らを人びとに示された。人間の理性は、完全性の欠如ゆえに、神の完全性を認識することはできない。つまり人びとは全体を理解することはできない。しかし、人間の理性は、本質性、つまり神は我々の思考において定義されるものではないという概念を認識することはできる。

神の憐れみは人間を、そして人間のために住む場所を創造された。それゆえ、我々は、神の喜びに加わることができる。神は、我々に、理性 (die Vernunft) と自由意志 (der freie Wille) という2つの重要な贈り物を与えた。理性と自由意志によって、人間は動物から区別される。理性と自由意志は常に2つ揃っていないければならず、揃っていない場合、これらは役に立たないものになる。そして、地上における万物の中で、人間のみが善と悪を見分け、神が善の源であることを認識する能力をもつ。

あるもの (etwas) が善 (gut) として認識される時、その善を愛する、つまり神を愛する、という結果に至る必要がある。そして、人間の行動は、ある唯一の意向 (nur einen Sinn) をもつようになる。唯一の意向とは、善を、神を求めることである。もし、そうしたものを求めないで、何もしないでじっとしているのなら、それは善に対して怠けているのである。神のみが善を創り出すことができる。暗闇とは光の不足であるように、悪とは善の不足である。心は光を見ることができる目である。たとえ、罪が光の前で目を閉ざす時も、光は周りにある：さあ目を開けよ！

神は非常に憐れみ深く、信仰の薄いものへのしるしとして彼自身を証するために、そして希望をもつものを励ますために、我々のところに下ってきたださった。というのも、希望は信仰に続く2番目の徳である。希望、それは神が我々の願いをかなえてくださるということである。そして、願いとは、神にたいするキリスト教徒らしい純真さにおいてくる願いであり、それは神の国への祈りという結果になる。

(ED:474 Band:0123 “Aufsatzentwürfe, Windlicht-Ausgaben und Tagebücher”)

3. 考察

今回の調査において、白バラ抵抗運動を精神的に支えたともいえる回覧誌「風防燈火 (Windlicht)」において、トマス・アクィナス著『神学綱要 (Compendium Theologiae)』における「救済教義綱要 (Grundriss der Heilslehre)」が唯一紹介されていることが明らかになり、トマス・アクィナスがこうした抵抗運動に影響を与えていたことが分かった。「救済教義綱要」によると、善を愛し神を愛することは、善の追求という人間の行動を生み出す。そして善を追求しないでじっとしていることは、善に対して怠けているということであり、その結果、悪が力をもつことになる。

Webb (2010) は、「希望」におけるアクィナスとフレイレのつながりを論じている。Webb によると、アクィナスは希望の対象の条件として、未来、善、困難、可能を挙げているが、フレイレにとっても、希望は未来に方向づけられており、希望がむかう未来の善とは人間化であり、「非人間化しようとする力に直面して、人間化は、獲得可能な夢、獲得困難なものとなる」(Webb, 2010: 330)。

さらに、アクィナスによると、希望の後には大胆：未来の困難な悪への接近が続き、然るべき怖れと大胆をもって悪しき困難に立ち向かうという徳は、勇気という徳にほかならない (山本, 2014)。そ

して、Freire (1972) によると、愛とは、怖れの行為ではなく、勇気に満ちた行為であり、ゆえに他者への積極的関与である。

以上のことから、フレイレの「愛」における他者への積極的関与とは、被抑圧者の側にたつことを選択するというだけでなく、人間化という未来の善に向かって、アキナスのいう未来の困難な悪への接近、つまり未来の困難な悪に立ち向かうことを意味しているといえることができる。

「白バラ」は、ナチスの残忍非道な行為を前に見て見ぬふりをするのではなく、人間化という未来の善に向かい、無関心であり続け抑圧する側にいる人々の意識へ働きかけるという形をとることで未来の困難な悪に立ち向かった。

アキナスのいう未来の善への希望ゆえに未来の困難な悪に立ち向かうという点で、人間化という未来の善に向けて、ナイーブな抑圧者を非人間的な状況から解放しようと試みたフレイレのシンポジウムにおける試みと、無関心であり続けることが善の欠如（＝悪）へとつながることを指摘し、抑圧する側にいる人々の意識へと働きかけ善を追求した「白バラ」のつながりが考えられた。

注

1. 民衆、主として貧しい民衆によって構成される。そこでは、意識化、聖書の学習、礼拝、相互扶助、そして自分たちの権利を守るための政治活動が一つに結び合わされる。BCCの規模はさまざまで、12人くらいから100人、あるいはそれ以上の数の人びとからなるものまでである。このような共同体は、ブラジルだけでおよそ8万あるといわれ、ラテンアメリカ全体にわたって存在している（ベリイマン、1985）。ベリイマン（1985）によると、こうした数量的な存在以上に重要なことは、BCCが代表するようになってきた社会的な力である。BCCの起源と機能、そしてその政治的意味についてはベリイマン（1985）が詳しい。
2. 正教会、聖公会、バプテスト教会、ルター派教会、メソジスト教会、改革派教会、合同教会、復古カトリック教会、聖トマス教会、メノー派教会、友会徒教会、会衆派教会、使徒教会が含まれる。また、WCCは、ローマ・カトリック教会との公式的な働きにおける関係や、まだ構成員ではない福音派やペンテコステ派教会との新たに発生した関係もある。
3. Freireの発題テーマは、「教育・解放・教会」であり、このテーマを深刻に提言する時、もはや教会や教育の「中立（neutrality）」について語ることはできない（Freire, 1973）。「中立」の主張というものは、教会と歴史への単純で幼稚な見方をする人びとや、現実的理解を中立の要求（a claim of neutrality）の背後にそつなく隠してしまう人びとからくるものである。彼らが歴史に関係する教会の「中立」を主張するとき、彼らは必然的に一般大衆に対する権力エリートを支持する政治的立場をとることになるのである。つまり、フレイレによると、被抑圧者の抑圧者からの解放を目指す教会や教育の「中立」はありえないのである。
4. 権力構造のエリート同様、伝統的教会や近代化教会によって攻撃・反対されながら、予言的教会によるこのユートピア的・予言的・希望にあふれた運動は、一人よがりの世のため人のためという態度や一時しのぎの改革を拒絶し、革新的な社会変化に従事する。静的・固定的な考え方を拒絶し、批判的に考えるために、予言的教会はかれら自身を「中立」とみなさない。予言的であるということは、対立が存在する社会構造への批判的分析、イデオロギー的選択を要求する。また、プロテスタントやカトリックという区別は重要ではなく、ラテンアメリカの予言的キリスト教は、被抑圧者階級に加わるために、無知であることを非難し、従事することに忠実であり続けた。予言的教会は、空虚な公然の非難により被抑圧者をより疎外するための家ではなく、抑圧されているものを「新出エジプト記（a new Exodus）」へと誘う。さらに、フレイレは、「イエス・キリストは決して保守的ではなかった（Christ was no conservative）」（Freire, 1973 ; 45）と指摘し、予言的教会は、キリストのように常に前進しなければならないと述べている。こうした予言的教会の教育的役割とは、上述した二つのタイプの教会の教育的役割と完全に異なり、教育は人間解放にむけて行動を変革するための手段となる。
5. 回覧誌『風防燈火（Windlicht）』は、戦争の進行に伴って、「相継ぐ発行禁止、執筆禁止、講演禁止」の命令によって公に物をいう手だてを失っていたカール・ムート、及びその周辺の高名なカトリック作家、哲学者の注目する所となり、学生たちの作品と、彼ら「おとな」の作品が並んで掲載されることになった（山下、1986）：90。

参考文献

- C. ペトリ著／関楠生訳（2006）『白バラ抵抗運動の記録-処刑される学生たち-』未来社刊
法務省（2001）平成13 年末現在における外国人登録者統計について
http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/press_020611-1_020611-1.html（2014.05.15 アクセス）
法務省（2013）在留外国人統計（旧登録外国人統計）統計表

<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001118467> (2014.05.15 アクセス)

- 前村絵理 (2015) 「幼少期における異文化間教育」『お茶の水女子大学子ども学研究紀要』3, 61-70
- 山口隆介 (2012) 「トマス・アキナス『神学綱要』抄訳 (第2部第9章および第10章)」『聖泉論叢』20, 25-36.
- 山下公子 (1986) 「ある若者たちの生と死(2)ミュンヘン・白バラの記録から」『現代の理論』23(2), 80-92.
- 山下公子 (1986) 「ある若者たちの生と死(9)ミュンヘン・白バラの記録から」『現代の理論』23(9), 88-99.
- 山本芳久 (2014) 『トマス・アキナス肯定の哲学』慶應義塾大学出版会.
- Berryman, Phillip. 1984. "Basic Christian Communities and the Future of Latin America." *Monthly Review* 36(3), 27-40.
- Freire, P. (1972). *Pedagogy of the oppressed*, Harmondsworth: Penguin. (小沢有作・楠原彰・柿沼秀雄・伊藤周(訳)1979『被抑圧者の教育学』垂紀書房)
- Freire, Paulo. 1973. "Education, Liberation and the Church." *RISK*, 9(2), 34-48.
- Webb, Darren. 2010. "Paulo Freire and the need for a kind of education in hope." *Cambridge Journal of Education* 40(4), 327-339

インゲ・アイヒャー＝ショール遺品

ED: 474, Band: 0123, Bestand: Aicher-Scholl, Inge, Title: Aufsatzentwürfe, Windlicht-Ausgaben und Tagebücher
ED: 474, Band: 0185, Bestand: Aicher-Scholl, Inge, Title: Strafsache gegen Scholl und Andere

まえむら えり／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科研究科 人間発達科学専攻

指導教員によるコメント

前村さんは、博士後期課程において、修士論文で注目したフレイレの思想をさらに深める研究を続けてきました。昨年に実施したジュネーブにおける資料・文献調査によって、フレイレと解放の神学における「普遍的愛」のつながりが見いだされました。そして、フレイレ教育思想へのさらなる理解のためにはフレイレの「愛」概念への考察を深める必要性を感じて、今回の資料調査を行いました。ミュンヘンの現代史研究所へ赴き、現地のアーカイブにおいて調査研究を行った結果、フレイレとのつながりがすでに論じられているトマス・アキナスが白バラ抵抗運動に影響を与えていることが分かりました。このことは、白バラ抵抗運動におけるトマス・アキナスに着目することで、フレイレの「愛」概念への理解を可能にするものとして注目されます。渡航前に入念な計画が立てられ、十分な準備がされていたこともあり、ミュンヘンの現代史研究所のアーカイブにおける調査は実りあるものになったといえましょう。

(人間文化創成科学研究科人間科学系・小玉亮子)

A Study about the concept of love in Freire's pedagogical thought

Eri Maemura

My study in Geneva last year revealed the relationship between Freire and universal love in liberation theology. It was conceivable that what White Rose, a non-violent resistance group in Nazi Germany, attempted is also the practice of universal love. Therefore I visited IfZ's archives in Munich to deepen my understanding of the concept "love" in Freire's pedagogical thought, revealing the relationship between Freire's thought and White Rose. I studied with many materials, which are relative to White Rose there. Focusing on the magazine "Windlicht" in Inge Aicher-Scholl collection, I found that Thomas Aquinas had an influence on the members of White Rose. The relationship between Freire and Aquinas are mentioned in previous study. Here it can be said that there is a relationship between Freire and White Rose with the use of Aquinas's thought.